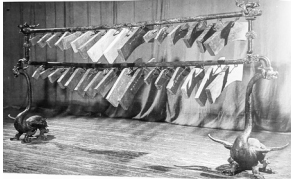
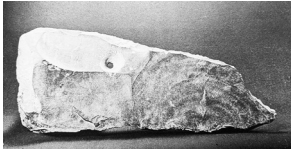


## 石製の楽器

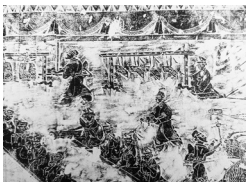
古代中国では、理想的政治が敷かれていれば、楽人の打つ石の音にも、動物が感応して舞うといわれる。「楽人の夔は『わたくしが石を打ち鳴らしますと、百獣がともに舞い踊ります』と言った(夔曰於予擊石拊石、百獸率舞)」(『尚書』舜典)とある。その石とは、どんなものだったのか。『中国楽器図鑑』(中国芸術研究院音楽研究所編 1992年 13頁)に、山西省から出土したとされる石が、今から4000年前の楽器「磬」であるとの記載がある。これがただの石片ではないのは、真ん中に穿たれた穴があるからだ。中国の音楽考古学研究者張偉氏は、後世のように何枚か一緒に吊り下げてメロディ楽器として用いられたのは、殷墟文化第二期からであるとしている(『关于殷墟出土磬的几点探讨』『中国音楽学』2010年第1期)。



左図の獅子のような動物がほられた殷代晩期の磬(『中国楽器図鑑』15頁)一件をみると、これ一つで十分存在感があり、殷代では単体で響かせていたこともあったと考えられる。



後には、戦国前期の曾侯乙墓出土の「編磬」(同26頁)のように必ずセットで使われた。それは漢代の画像石(同31頁)でも確認できる。画像石には、横に編鐘が配されている。金や石で作られた楽器から発せられる音は、当時の人の耳にどのように届いたのであろうか。決して軽快には奏でられないこれらの楽器は、天地の神々や、祖先を祀るのに、敬虔で厳かな雰囲気を出していたに違いない(左図参照)。



漢代にまとめられた儒教の儀礼音楽を解説した『礼記』楽記にも、先王が廟を祭るときに用いられた楽器の音の記載がある。磬については、「石声すなわち磬の音色はキーンと響いて澄みきった感じを与えます。澄みきった響によって義と不義のけじめをすっきりさせ、けじめをすっきりさせることによって、義のために一命を捧げます。だから君子たるもの、磬の響を聴けば、国境を死守する守備兵のことに思いを馳せるのです(石声磬、磬以立弁、弁以致死、君子聴磬声則思死封疆之臣)」(福永光司『芸術論集』朝日新聞社中国文明選 14 1971年 123頁)とある。先王の祭りに使われた楽器には、その音一つにも意味づけがなされたのである。

## 泗濱石と華原磬

皇帝の祭りに不可欠な楽器とされた磬は、以後綿々と雅楽奏楽に使われた。ただ、石の素材を変更したことがあった。唐代中期の白居易(772~846)の諷諭詩「新樂府」のなかに、「華原磬」(那波本『白氏文集』卷三)と題して詠じられている。「今の人と古の人とで、どうしてこんなに違いができたのか。楽工の言いなりになり華原磬を用いて、泗濱石を捨てたからだ。楽工はいても、その耳は壁のよう、音の清濁を聞き分けられず、それこそ聾者だ(今人古人何不同、用之捨之由樂工、樂工雖在

耳如壁、不分清濁即為聾)」と。唐における音楽の衰退を象徴するのが「華原磬」で、古のすぐれた音楽を表わすのが「泗濱石」である。「泗濱石」は由緒正しい石であり、儒教の経典『尚書』禹貢に記されている。それを廃して「華原磬」を用いるとは、けしからん、という口吻が伝わってくる。さて、「華原磬」を用いることにしたのは誰か。白居易は続けていう。「梨園の弟子(玄宗期の宮廷音楽師)が音の調子を調えるが、彼らは当世流行の新しい音楽はわかるが、古の音楽については何も知らない、(梨園弟子調律呂、知有新声不知古)」と。白居易が古の音楽というのは、先に引いた『礼記』にある、磬の音色により、辺境にある臣下に君子が思いを馳せるというものである。玄宗の天宝年間に「華原磬」が用いられるようになってからというもの、皇帝の心はすっかり辺境の臣下から離れてしまったという。古を良しとして今を批判する諷諭詩としての筋書きは十分理解できる。しかし筆者は、宮中音楽文化の発展に心を砕いた玄宗皇帝の下で、技能を極めたと考えられる梨園の楽人が、わざわざ用いた「華原磬」は、実は雅楽の演奏にも芸術性向上のうでで貢献したのではと思うのである。『礼記』楽記には、古楽を聴くと眠くなり、新楽を聴くと心が躍ると戦国時代の魏の文侯(BC446~BC397在位)の述懐がみえる。つまらなくなりがちな雅楽についても、音楽に精通していたとされる玄宗は、従来のものでは飽き足らず、なんとか美しい音色を求めたのであろう。その芸術性を重んじたゆえのマイナーチェンジを肯定的に考えることも、許されてよいのではない。

## 興福寺の華原磬

筆者が長らく不思議に思ってきたのが、日本の興福寺に「華原磬」として、獅子と龍に護られた下図の金鼓(興福寺ホームページ、寺宝・文化財より)が置かれていることである。金鼓は石製ではないのになぜ磬といわれているのか。白居易の新樂府がよく流布した日本において、なぜ否定的な意味を担う「華原磬」と命名されていたのだろうか。興福寺の雅楽については、磯水江氏編の『興福寺に鳴り響いた音楽—教訓抄の世界』(思文閣出版 2021年)があり、興福寺は大陸から流入した音楽が奈良時代に定着するうで、重要な役割を果たしていたことがわかる。先のホームページの解説によると、「華原磬」は、天平6年(734)創建の西金堂の仏前に飾られていた。さらに、問題の金鼓の部分は鎌倉時代の後補であるそうだ。734年は玄宗在位の開元22年にあたる。玄宗は在位後半の天宝期には楊貴妃にうつつを抜かして王朝を傾かせたが、開元期には政治的手腕を活かして唐の繁栄を築いたことで知られる。その開元期に玄宗は雅楽の整備にも腐心した(拙著「唐代開元における礼楽の完成」『天理大学学报』第252輯 2019年)。この「華原磬」は、白居易がまだ生まれていない開元期にすでに日本にもたらされており、当時は石製の磬が一片、金鼓の位置に吊り下げられていたのではないだろうか。それは芸術的に優れた唐の雅楽を誇示する一品であったはずである。この憶測については博雅の示教を乞いたいと思う。

